

愛珠

想い出ずるままに(四)

中村道子



(一) 転任前半年の経験

後援会と母の会の、合同役員会の日、審議に提出した、新しい愛珠後援会々則の原案を、総会の保護者一同に手渡して審議してもらい、全会員が承認して下さったから、自分が在任中の後援会は、この会則で後援を依頼し、私は安心して、日々の保育に専念することができた。

応接室の隣の園長室までには、子どもらの声は聞こえない。遠くで遊んでいる声か、それとも付添いの人と語りながら、廊下を歩く声は聞こえても、賑やかに遊んでいる声は聞こえない。先生方の声も全く聞かれない。用事ができても、長い廊下を通らねば逢えないから、実に不便であった。幼稚園で子どもらの声の聞こえ

ぬことは、実に淋しいから、保育室や職員室に近い所へ、机を持って行こう、宿替えをしようと、決心したのである。

職員室や保育室に、水道の便や洗面器もあるから、幼児の寝台や衛生戸棚をそのままにして、自分の机だけ移せばよい。もし病児ができた場合は、私がいれば用はたりるし、担任の手を煩わさずに処置ができるから、保育には差支えなくことがすむので安心だと思った。幸い保育室が一部屋空いていたから、私の室に近いのを職員室に替えたのである。

今度の新しい園長室にある一間半の押入の、四枚戸を全部はずし、柵のないのを幸いに、寝台をどんと奥に押したら、ちょうどはいり、目障りにはならなかった。職員机が、一つ空いていたから、自分の机と角形につけたら、机上は広くなって仕事がしやすく、落ち着いてよく手についた。

毎朝各組が一行になつて、担任が引率して、皇大神宮に参拝していたが、創立記念日の翌日から、幼児各自が登園の直後、参拝することに決め、一人でできることは、なるべく自分ですることに話した。そしてこれと同時に、従来は音楽によつて、朝の集合に決めていたが、今後は鐘を鳴らすことにし、そのとき三つ鳴れば朝の集合、搾り半（連続に鳴る）なれば、非常集合とすると、約束し、搾り半はいつ鳴るかわからぬから、よく注意して聞くことをいった。「皆が大きくなつたから、こんなむずかしいことを、おけいこせねばならない、嬉しいでしょう」といったら、「ハイ」と嬉しそうに、あちこちで返事が聞こえた。

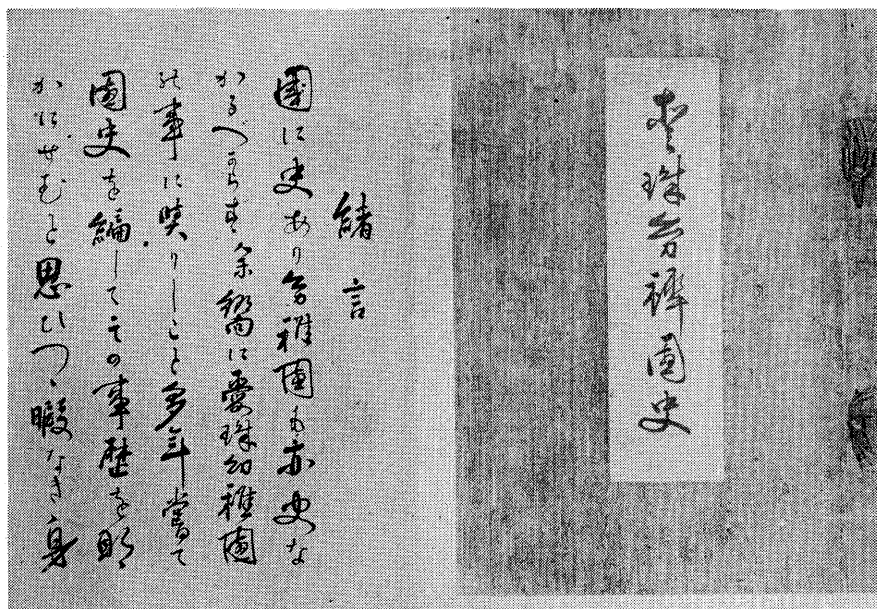
全国の社会状況は、いつも同じではない、私はこうした団体生活をする者として、子どもながらも、避難訓練をせねばと思ひ、この日から、幼児の非常集合練習を始めたが、この間、ほめたり、応援したり、喫驚してよい批評をしたり、場所を替へたり、保育中であつたり、午前と午後の二回であつたり、午前中に二回したり、またいく時間も経ていなかったり、繰り返して、練習した。子どもらの動作も、力強くなり、漸次敏捷になつた。先生方も、よくこれらに合せて下さつたから、子どもたち自身も喜んだ。

園長室の入口の前に、二、三人の幼児が立つて、じつと私の方を見ていたから、これに気づいて、手招きして机の前へ呼び、「何をしているの」と笑いかけて問うと、種々おもしろそうに話

してくれた。たまたま用事ではいつて来られた先生が、「ここにいると、園長先生がご用ができないから、お外へ行きましょう」といひながら外へ連れて行こうとされたから、「私が呼びました」といつて、そのままおらせ、二、三日後にあつた職員会の時に、「机の側へ子どもが来た時、私が保育する唯一の時です。それが保育をしている一つだから、こんな時にはそのままに置いて置いてちょうだい」と笑ひながら頼んだ。また談話研究会の機会をとらえて、お絵描きとか、お外等の例をとつて、無暗に「お」をつけないように注意しましょうともいつた。

六月も半ば過ぎたある日、珍しく晴れていた午前十時頃、「広島文理大学の長田新先生が、お越しでせ」と、奥井のおばさんが取り次いで来たから、私は喫驚して玄関の方へお迎えに出た。

長田先生のフレイベル伝記を読んだり、その他の教育書で、名を知っていたが、直接お目にかかることは、はじめてであつたから、嬉しかった。着任以来少しずつ読んでいる沿革史と、この園の創設者の一人である滝山監事が、稲葉園長に送つた、自分の記憶を書き綴つた、自筆の和本の沿革史も、読んでいたから、お尋ねになるままを答えた。そしてその昔、資料室にあつた、明治初年の保育関係の古書は、全部遊戯室の二階に、戸棚包み陳列していたから、お目にかけたが、先生は「中村さん、すばらしい物があるね」「ハイ、こんな所へ置いては、いけないと思いますから、これらを、倉の方へ持つて行つて、向かうの物を、ここへ置くつ



滝山監事、自筆の園史

もりでおります」といったら、先生は笑いながら、「つもりとは何ですか!! 直ぐしなさい、早い方がよろしい」と、きっぱりいって下さったので、私は嬉しく思い、早く倉を整理して、昔あったように、そこを資料保存室に、定めようと決心した。それから順を追って、ご覧になっていたが、壁を背にした戸棚の前に立つて、「これは家鳩の遊戯の絵だね」じつとご覧になって、「この洋装の婦人は松野クララさんだね」「そうです。この丸髻の方は豊田英雄先生で、少し若い蝶々髻の先生は、近藤浜先生のように私は思いました」「ふうん! そうだろうね」そして隣に並んでいた、幼稚園法の絵をご覧になって、「二十人の子どもの手技は、二十遊戯を現わしているね」先生が細かいことまで少しの時間で、ご覧になっていることに驚いた。

先生が、それから次々、ご覧になっている間に、——この南側の戸棚は、このまま倉の一階に入れ、西側には全部取付け押入を作り、一間幅に区切って、柱と同じ色に塗って、目立たぬように美しく作り、高さは窓の下までとして、彩光に注意し、北側にある屋形船の戸棚は、倉の入口は通れないからあのままとし、創設者四人の額もそのままかけ、倉の物を早く入れ替えよう、今日長田先生がお越し下さって、注意していただいたことは、大切な教えであって、急いで実行しようと決心した——。このことを先生に言って、私はお礼を申した。一通りご覧になったので全園をご案内した。応接室でお茶とお菓子を召し上がり、暫く休憩の後、広



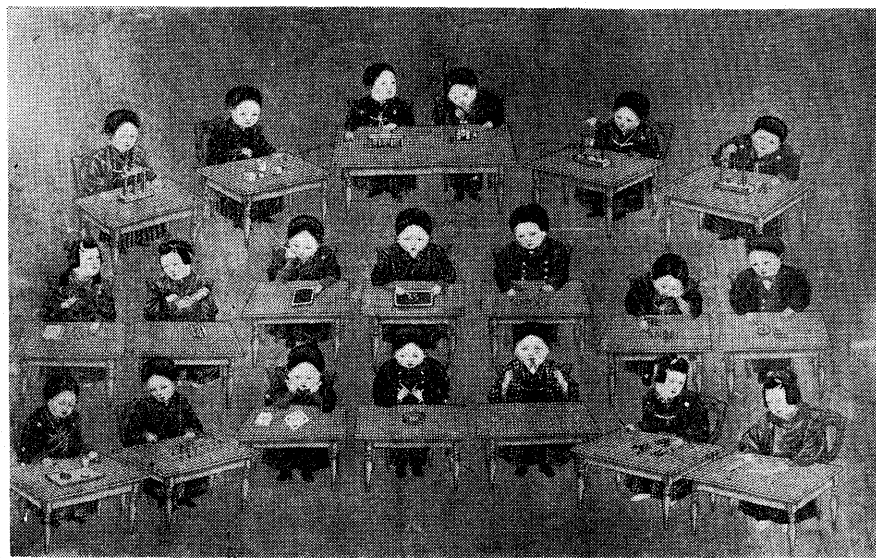
幼稚鳩巢戯戯之圖

図の鳩家戯遊

島の方へお帰りになった。

遊戯場の四方の各面に、一つずつ気品のある日本画がかかっている。正面は申すまでもなく、裏金の絹地に、宮城の絵が描かれていて横五尺に縦四尺の大きい額だが、全体の半分下は宮城前の広場で、松の梢の緑のみと、中央右よりに、正成公の銅像あたりの松の繁みを、少し薄くして他は金泥でぼかし、中央から上部にかけて、二重橋、多聞櫓、石垣等を、常磐の松が深く包み、微に屋根も見えて、画面に陰影があり、幽邃の中に引き入れられるように、陶然となるものであった。正面に向かった西側の欄干には、花咲爺が満開の山桜の幹に昇って、手籠を左に掲げて、桜の枯枝に灰をまき、ぱっと花が咲いて、お爺さんが口を開けて笑ったところであって、軽快さが現われている。

玄関から遊戯場にはいって、直ぐ目に入る物は桃太郎の図で、じっと見つめていれば、莞爾と微笑む無邪気な、しかも勇壮な感じを受けるものであった、智仁勇を現わすという、三匹の犬猿、雉子は、各々個性を現わして皆可愛らしい。南側の欄干に懸けて運動場に向かっているものは、桜井の駅における楠公父子の別れの図で、松の木の下に敷かれた板の上で、父に向かって両手を仕え、訓話に聞き入っている正行を絵描いた物で、これに見入っているうちに、私は附小の高等一年の時、受持の奈良先生が、歴史の時間に、涙ながらに笠置落の所を話され、自分たちも涙を溜めて聞いたことを思い出した。



幼稚園法・二十遊戯

これは幼児には少しむずかしいが、私は奈良先生のことを思い出したから、後援会長の長田さんにもこのことを話した。「これらは皆、よい絵ですなァ!!、どれも日本画で、まやかし物でないから、見入っていても、厭気がささないからよろしいですわ」

「そう思いはりますか、区内に住んではる耕園さんや、耕沖、耕甫、直城さん方に描いてもらいましてん、会長や私たちが相談して頼みましてん」「まあそうでしたか、それは大きにありがとうございますました」

最近長田さんとも打ち解けて話すようになり、家族の人たちも、親し気に話しかけるようになったことは、私として嬉しかった。

この今橋三丁目の町会長は、長田さんであって、幼稚園も同じ町会にはいつていた。

今日は七月二十八日である。いよいよ開放保育最後の日であるから、今日から懸案の倉庫の清掃を、行なうと計画を立て、地階をはじめ一階二階と順を追うことにしたが、何が出て来るかわからない大仕事であって、とにかく地階から始めることとした。

一階はときどき校務員が掃除したが、地階には押し込み、押し込みしていたから、手のつけようもなく、ちょっと途方にくれた。稲葉園長時代に、鉄筋に改造せられたとのことを聞いて、いまさらのように、感謝せずにはおれなかったのである。

頑丈な二段作りの棚の下段に、その頃使われたらしい、幻灯が見えたので、埃を払ってよく見ると、中に東京百景の写真を綿布

で密着させ、回転式になっていて、一景変わるたびにチンと鳴るようになっている、幻灯でなく視眼鏡であった。箱の両脇のガラスに花の絵が描かれ、他は黒塗で唐草模様をあしらった美しい物であった。またこの下に大きい茶箱があって、中に暗幕がたくさん入れている、幻灯をしていた頃、遊戲室の一階と二階を囲むには、これ位は入用だろう。またその隣に列んでいる中箱から、遊戲劇に使ったらしい、衣装の一部と小物の残りなどが出てきた。この他、田作りの道具や、幼児に試食させた食器も、石炭箱に入っていた。地下室がこれ位の広さなら、全体の幼児も入れられる。この頃よく聞く防空壕にあてて避難する訓練をして、動作を敏捷にする訓練もできる。このことは、この園の幼児には必要である。体格は前任校園の子どもらと比べて、愛珠は少し劣っているから、これを解消することは、一つの念願であった。

倉庫の二階には、四方の壁から二尺程間をあけて、大きい広い頑丈な、二階式の置棚が中央に、でんと坐っていた。棚の下段にある平たい大きい木箱に、修身図や額にはめ込む絵画を入れ、ドイツの有名会社製のバイオリンが和製の物と肩を並べて、各々箱に入れられて置かれ、三角の木箱のジャミセンの箱も、この仲間入りをしていた。少し離れて五個入りの茶器の箱も置かれ、組立式の勅語奉安殿は、各部をはずしてしまい、棚の下空間には、十三琴や雅楽の琴も、箱に入れられて積まれていた。上段の棚には何かしら大小の木箱が置かれている。日常使わない物らしい。

三十年も勤続しているという小使さんに、「これだけ物があるなら、整理に大変だったでしょう」といったら、「よい物はもうごわへん!!、愛日の二代目の校長はんになって、きたない、きたない整理するから何でも皆出せといわれて、遊戲室に一杯出ししました。十個揃った桐の丸胴の火鉢も、ここに掛けてある大きい時計も、しまいには毎日見てる時計まで、出せとおっしゃったが、見る物がのうなるよってん、隠しときましてん。今小使室にある、あの小さい柱時計がそうですねん。いろいろよい物がありましたが、皆その時売りはりましてん。今倉にある物は、がらくたばかりで惜しかったと思いますわ」「ふうん!! そうでしたか、それは惜しいでしたなァ」「今遊戲室の二階にある古い本は、戸棚と一緒に米山園長が二階へ上げさしたんで、戸棚のない物は倉へ片付けましてん」「そうでしたか、よう分りました。おじさんたちは、惜しいと思いなさったやろうなァ」——私は思った。きたないといって、あの和本を皆紙屑屋に売らなくてよかった、残されていてほんとによかったと。

現在一階の倉にある茶箱から、はみ出して周囲に溢れでいる書類は、何が書いてあるか分らないが、昔を語る物らしい。たとえきたなくても、一応調べて整理せねば、中から何が出てくるか分らないと思ったのである。そのためこの調査は休暇中にとし、とし、地階を早く清掃して、幼児全部がはいれる室にと雑具は空いている保育室を提供することとし、運搬を急いだのである。